



駿府周辺の主要街道推定図と城郭

賤機山城 しずはたやま 静岡市葵区大岩

今川館が平時の居館であるのに対し、賤機山城は戦時の詰の城である。駿府周辺の城砦群の中では、最も早く築いたと思われ、南北朝期の狩野貞長が拠った安倍城が真正面にみえることから、初代今川範国の時代に、安倍城監視のための砦を築き、今川時代の最後まで最も重視していた城である。

浅間神社の背後から尾根伝いに歩いていくと、深さ8m、幅5〜8m、長さ10mの大きな空堀にぶつかる。中世の山城は、尾根続きの山上を使い、守りやすいように複数の曲輪を配置し、一番はずれに大空堀を設け、尾根を遮断する。

武田軍の駿府侵攻で、今川氏真は賤機山城に籠る作戦だったが、すでに武田軍が陣を置いており、氏真は建穂寺、富厚里、山家(川根街道か)を経て朝比奈備中守泰朝が守る懸川城をめざした。



安倍城山頂より賤機山城を望む(撮影:水野茂)

寿桂尼 じゅけいに 生年不詳〜1568



京都の公卿中御門宣胤の娘として生まれ、今川氏親と結婚して駿河に下り、氏輝、義元を生んだ。氏親の没後は髪をおろして寿桂尼と名乗り、14歳の若さで家督を継いだ氏輝を補佐し、「歸」の印を用い、二七通以上の印判状を出すなど政治を左右する実力者となり、駿河の尼御台の異名をとった。兄や妹も、京から駿府に下ってきた。桶狭間の戦いの8年後、今川領国の崩壊が始まるなか「わが死後、鬼門に葬られ、今川館を守護せん」と遺言し、龍雲寺に葬られた。

宗長 そうちよう 1448〜1532



島田の刀鍛冶・五条義助の三男。今川義忠に近侍し、18歳で剃髪。義忠の没後に上洛し、大徳寺の一休宗純に参禅、宗祇に師事して連歌を学んだ。連歌は主従の結束を強め、戦勝を祈願するものとして戦国武将に好まれた。宗祇の旅に随行後、駿府の河辺に結庵し、龍王丸(氏親)を助けた。宗祇の没後、1504年(永正元)、氏親から丸子の泉ヶ谷に柴屋軒を与えられ定住。京と駿河を往来し、今川氏のために画策した。句集、連歌論書、紀行、日記、随筆にわたり多くの著作がある。